



ガン病棟の九十九日

児玉隆也

新潮社版

びょうとう きゅうじゅうきゅうにも
ガン病棟の九十九日

定価 700 円

発行 昭和50年9月10日

4刷 昭和50年11月25日

著者 児玉隆也

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

業務部 (03) 266-5111

電話 編集部 (03) 266-5411

振替 東京 4-808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Masako Kodama, Printed in Japan 1975

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ガン病棟の九十九日 5

さるのこしかけ 73

“天使”の報われぬ町 75

イシヤとキシヤの払いもどし

さるのこしかけ 84

*

手記（兎玉正子） 97

闘病ノート 151

ガン病棟の九十九日

ガン病棟の九十九日

一本の電話

結婚して十二年になるが、妻が哭くのはこれが三度めだった。

その夜、私の仕事に対して、ある賞をいただくことが決まったという報せの電話を受けていた妻は「ありがとうございます」と震え声で言ったまま絶句し、受話器を私に押しやると、台所に駆けこんで水道の蛇口をいっぱいに開いた。彼女は嗚咽を子供たちに気づかれまいとしているようにみえた。だが、いまになってわかるのだが、あのときの妻の神経は子供にはなく、私に嗚咽の意味を穿鑿せんさくされることの怖れに集中していた。

私は、妻の涙が、あまりにも重苦しかった一日の終りに、思いがけぬ報せを聞いた戸惑いのせいだろうと考え、そのまま今日の昼間病院でもらった痛み止めのカプセルを服のんで眠った。夜なかになって、私は小便をしに起きた。放尿をしながら、もう「きのう」になったが、

がんセンター病院の外來患者用トイレで見た落書きを思いだした。薄い水色に塗ったドアには、駅や公園の便所にもあるその種の稚拙な落書きにまじって、ひととき大きな籠文字（ふうもじ）があった。

「神様、私の癌を治してください」

その横に別人の字で、

「齡をとったらもうだめだ」

と、か細く弱い筆圧で書かれていた。

そうだ、私は好奇心のあまり、いや、怖いもの見たさで、といった方が正確かもしれない、用を終えたのにわざわざ隣の便所にも入ってみたのだった。すると、あった。

「先生、早く薬を発見してください。お願いします、早く！」

ストープのある部屋にまだ灯りが点いていて、妻が起きていた。私はふざけて言った。

「カミさま、私の癌を治してください」

見ると妻は、私の下着にフェルトペンで名前を書き入れていた。入院の準備のようだった。それだけのことに、私は無性に腹が立ち「おい、早く寝ろ」と怒鳴った。それから十二月の夜風に冷えた布団にもう一度もぐりこみ、「神様、私の癌を治してください」と書いた患者は、私のようにまだこれから幼い子を育てなければならぬ若さなのだろうか、それとも、もう子に背そむかれるほどの齡かさなのだろうかと考えたように思う。そしていい気なもので、

怒鳴られて私を見上げた妻の眼の赤さを、寝不足だと片づけたほどだから、私は思い遣りのある夫ではない。

妻の赤く腫れた目は、先刻の嗚咽の続きのようだった。あとで、ずーっとあとでわかったのだが、その日彼女は、私の右肺が「癌」に冒されていると、医師からはっきり聞いていた。そしてほとんどの癌患者の配偶者のケースと同じように、彼女は「癌は本人に告げるべきではない」という信仰に遵^{したが}おうと覚悟を決めた。彼女が、あの時水道の栓をいっばいに開いたのは、その日一日中、独りでこの訓^むえに忠実でいた緊張感と重圧感が、一本の電話で崩れたせいだった。

がんセンターに行ってください

禍福は糾^{あざな}える縄のごとし、の一日は昨年十二月十一日のことだが、そいつはいきなりやって来たわけではない。

梅雨のころ、右の胸から肩胛骨にかけて、激しい痛みが突きぬけた。こういう場合、多分ほとんどの人がそうするように、私は開業医を訪ねた。一軒めは家の近くにあり、医師一人で五つの診療科目を掲げ、待合室はいつも患者であふれている。二軒めはいつ行っても患者の姿を見たことがなく、医師は診察室で所在なげに詩集を読んでいた。その二軒が、神経痛だ、肝臓が疲れているねえ、ほう、血液中の尿酸の含有量が高いよ、いえ、写真を撮^とりまし

だが胸は正常です、首の骨がずれているから痛むのです……と、つまりは誤診をくりかえしている間に半歳がすぎ、冬になって血痰けつたんが出た。私は国立療養所東京病院を訪ねた。開業医があわてて、結核だろう、と言ったからだだった。

「結核か。えらいことになったな」

と、私は傍らの妻に言った。診察してくださったI先生の奥さんと私の妻が知り合いということもあり、I先生は妻に向って「奥さん、結核ならいいですね、いまなら治せるんですよ。奥さん結核ならいいですね」と、何度もくり返された。私と妻は、この病院に来るまで、結核と考えただけで暗澹あんたんとした思いでいたが、I先生の言葉を聞いているうちに、夏の日の雨雲のように広がるある怯えおそを抑えきれなくなった。

へこれは癌かもしれないぞ」

実をいえば、私は開業医に通っている間に何度か、この痛みは肺癌によるものではないかと訊いたことがある。たまたま読んだ新聞の医学記事に書かれていた症状とへ似ている！」と思ったからだだった。だがその疑いは医師に一笑され、そのままになっていった。

それから三日後のことだった。I先生は私たち夫婦を別室に招き入れて、

「まあお掛けください」

と言い、レントゲン写真をライトビューワーに挟はさんだ。

見ると、右肺の鎖骨の下が、肋骨三本分にまたがって橢円形に白く挟はさまれていた。I先生は、

一呼吸おいた。それからきわめて事務的な口調で、それでいて「事務的」を粧^{よそお}う辛さをにじませて、さり気なく言った。

「結核菌が出ませんでした。明日、すぐに癌研ががんセンターに行ってください」

そして、あした私が訪ねるだろう癌病院の医師に渡すようにと、検査の結果を書いた紙を封筒に入れていた。

「癌だというのではないですよ。最悪の場合からチェックしておく方が安心ですから」という先生の声が、何枚もの鼓膜の向うから聞えてくるようで、それは二通りに聞えた。私のなかの素直なところはへそれもそうだと言ったし、芽生えはじめた猜^さ疑^ぎ心^{しん}はへほうれ見ろ、ものの本に書いてあるとおりではないか。こんなセリフを何かで読んだことがあるぞと執拗^{しつごう}にくり返した。じっさい、猜^さ疑^ぎ心^{しん}というものは底なし沼のようだ。部屋を出て廊下を歩きながら、私はいま貰った封筒が糊^{のり}づけされていないことに気がついた。なぜ封をしないのだろう。はあわざと安心させるためだ、と思ってしまう、中身を見ると血液がどうの、と書いてあった。「どうの」の部分は横文字と数字で、私にわかるわけがなく、まるで呪^{じゆもん}文^{もん}のようだった。

大きなレントゲン写真の袋をかかえて病院を出ると、花壇^{はなだん}の葉牡丹^{はふたん}の暗い赤紫色が、氷雨^{ひさめ}に濡^ぬれていた。あと二十日もすれば正月だというのに、何てことだ。

ほとんどがノイローゼですよ

翌日、私と妻は早起きをした。家からがんセンターまで、二時間はかかるだろう。私は一人で訪ねてもよかったのだが、背中の痛みはしょっちゅう撫なでてもらっている方がらくだし、それよりも、なぜか癌病院というところは、独りで行くにはふさわしくない病院のように思えた。医者は「あなたは癌です」と言うまい。「あなたのご主人は癌です」と言うというではないか。

それにしても待合室は何という患者の多さだろう。がんセンターのロビーの、およそ二十脚ほどの赤いソファ―は人で埋まっていた。

順番が来て、私は医師と向いあつた。医師は、私が持参した結核病院からのあの“呪文”を無表情に見ると問診をはじめた。ひと通り聞き終ると、短冊型の検査用紙に、ボールペンでつぎつぎに書きこみはじめ、その間黙ったままだった。私は沈黙が気づまりで、さっきからの医師のことばに関西訛なまりを嗅かぎとって「先生お国は？ 私おもねは——県です」と言ってしまったが、そのとたんにむらむらと自分に腹を立てた。医師に阿おもねる必要などこれっぽっちもない。いったいおまえは、何を期待しているのだ。どうやら私は、医師の背中に見え隠れして、じっと私を窺うかがっている癌におべっかを使つたようだった。そして腹をたてた。医師と郷里が同じだからといって、私の癌（もしそうだととして！）が消えてなくなるものではあるまい。

私は、先刻から訊きたかったことを、おずおずと訊いた。「この病院で検査を受けた人の何割が癌ですか」と医師は「ほとんどがノイローゼですよ」と答えたが、ボールペンの手は休めず、視線は検査用紙に落ちたままだった。

「検査がたくさんありますから、とりあえずこれを受けて来てください。その間にこちらの方に残りの検査を説明しておきます」と医師は言った。私はまず処置室で二十CC分採血され、血液検査で耳の血を取り、レントゲン室で写真を撮り、廊下とんびで結構いそがしかった。その間、妻は医師と向いあっていた。癌をめぐるストーリーにはつきものの「あとになってわかったことだが」という断り書きをここでもしななければならないのだが、私はそれからのことを、およそ四カ月後になって無理やり妻から聞いた。それによると、妻はその日すぐに結果が出るものと思っていたので、こわくてこわくてならなかった。妻の怯えは、病院の自動ドアを開けた時から徐々にボルテージを高めていたようだ。ドアが開くと、すぐに目に入る色彩があった。フラワーショップの華やぎと、正面の柱に貼られたポスターの色だった。癌の検診を恐れずに受けよう、という啓蒙のためのポスターなのだが、一面に赤紫色のインクで印刷され、近づいてみると、癌細胞のある臓器の拡大写真だった。妻はその色が怖くて、それからの病院通いの百日は、柱の脇を目を伏せて通ることになった。

本山でもガンは禁句

さて、彼女はいま、私が居ない部屋で医師と向いあっていた。すると医師が、

「あなたはこういう立場の人ですか」

と訊いた。妻はとっさに「これは、何かある」と感じ、「患者の妻です」と答えてから「あの……」と訊いたのだそう。あの……主人はやっぱりそうでしょうか？

医師は、七〇パーセントその疑いが濃い、あとの三〇パーセントについては検査してみないとわかりませんと答えた。そして看護婦に、ベッドの空くのを待っている入院希望者が今日は何人かと訊ね、ゼロだという答えに、ほう珍しい、こんなことはめったにないことですよと言いながら、「入院手続をとりますか？ その方がいいと思いますが」と助言してくれた。妻は頷きながらクスンと鼻をすすり、私が部屋へもどつてくるといけないので、何気ない風に化けた。検査が終つて、私は妻からその話を持ちだされ、またしても怒鳴った。私の言い分は「まだはつきりしないのに、なぜ入院手続をとるか」というものだった。妻は困りはてたようだ。すると、窓口の女性が「必ずしもここは癌の人だけじゃありませんよ」と言った。私はそのひとことで、毎日片道二時間あまりもかけて検査に通うのも大変だし、これから次々に受けねばならない検査は相当きついものだとか聞かされていたので、一応申込むだけ申込んでおくか、という気持になった。妻は、ホッとしたようだった。